

V 子どもの生活・健康

1. 放課後の過ごし方

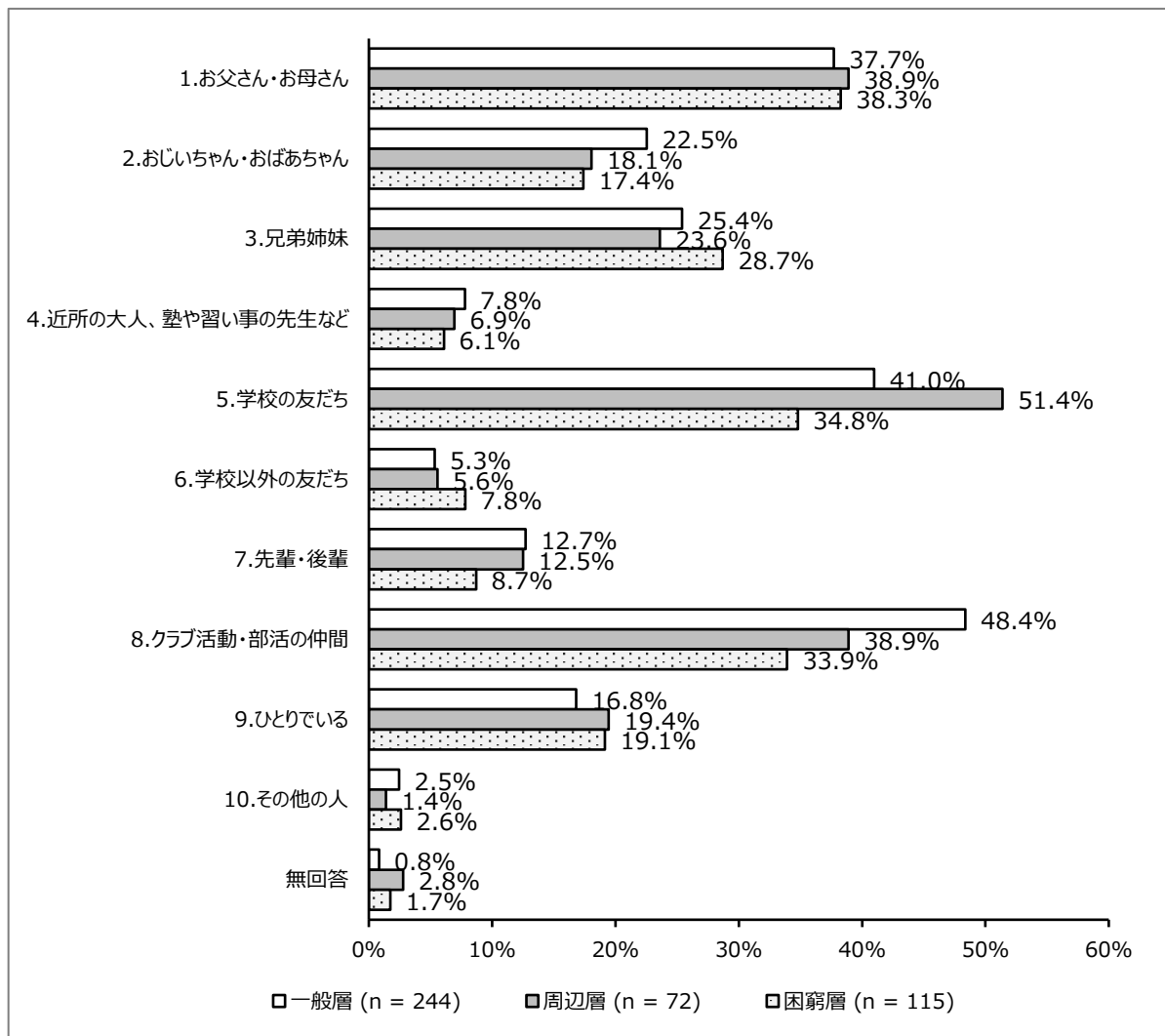
(1) 放課後に過ごす人と場所

中高生に、「平日の放課後に一緒に過ごすことが多い人」についてたずねた。全体としては、「クラブ活動・部活の仲間」が最も多く 42.8%であった。次いで、「学校の友だち」(40.8%)、「お父さん・お母さん」(38.1%)となった。生活困難度別に見ると、困窮層は「クラブ活動・部活の仲間」、「学校の友だち」が、他の層よりやや低く、前者は最も高かった一般層と 14.5 ポイント、後者は最も高かった周辺層と 16.6 ポイントの差があった。

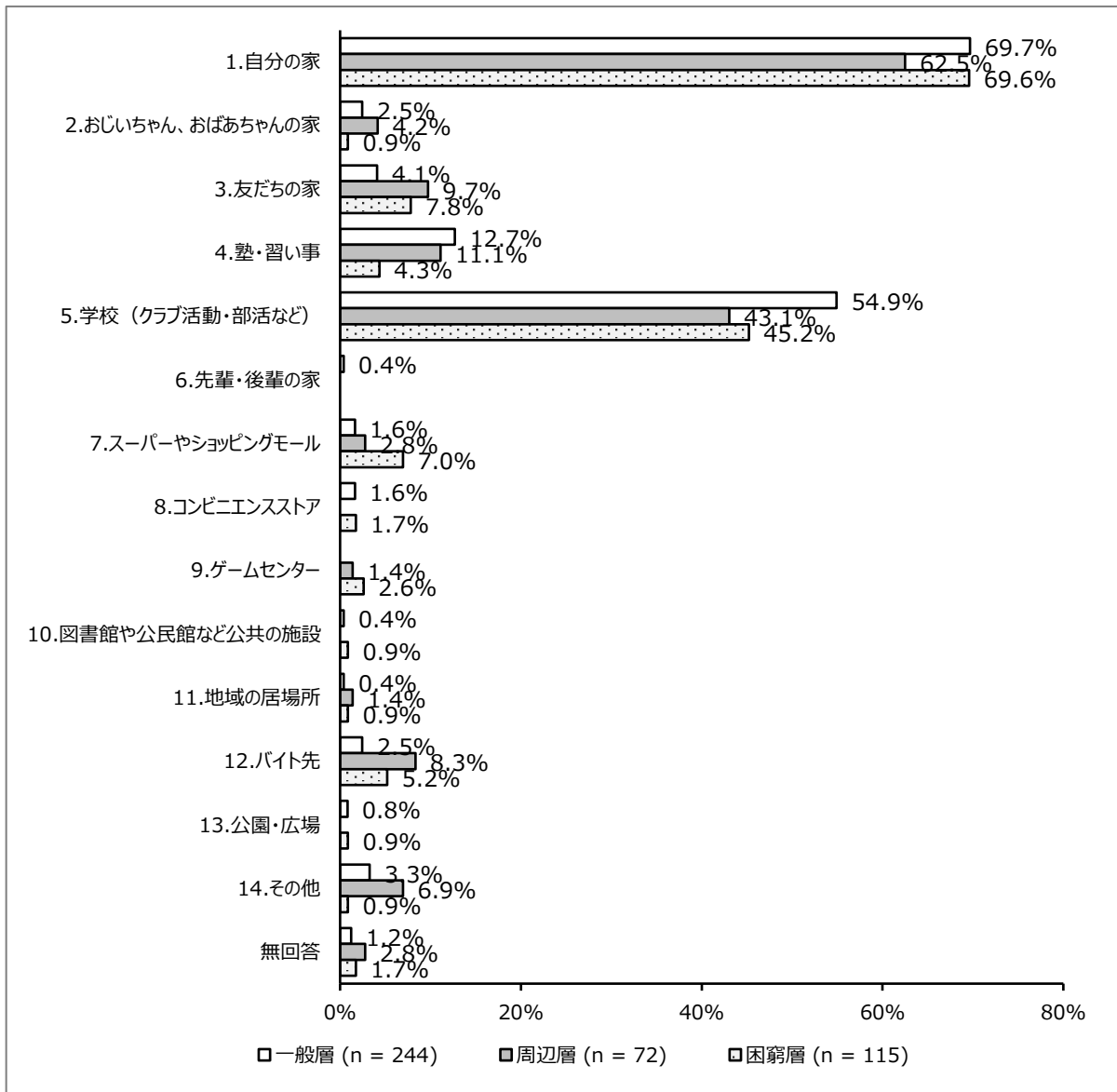
次に、「放課後に過ごすことが多い場所」についてたずねたところ、全体としては「自分の家」が約 7 割で最多となり、次いで、「学校(クラブ活動・部活など)」であった。生活困難度別に見ると、一般層は他の層に比べて「学校」で過ごす割合が高く、周辺層と 11.8 ポイント、困窮層と 9.7 ポイントの差がある。また、困窮層は、一般層・周辺層と比べて「塾や習い事」の割合が低く、「スーパーやショッピングモール」で過ごす割合が高かった。

なお、保護者には「子どもが帰宅している時間帯に保護者が家にいるか」をたずねている。この結果、一般層では 71.1%の家庭が子どもの帰宅時に保護者がいるが、周辺層では 64.6%、困窮層では 54.2%と、困窮度が増すごとに割合が減少していた。

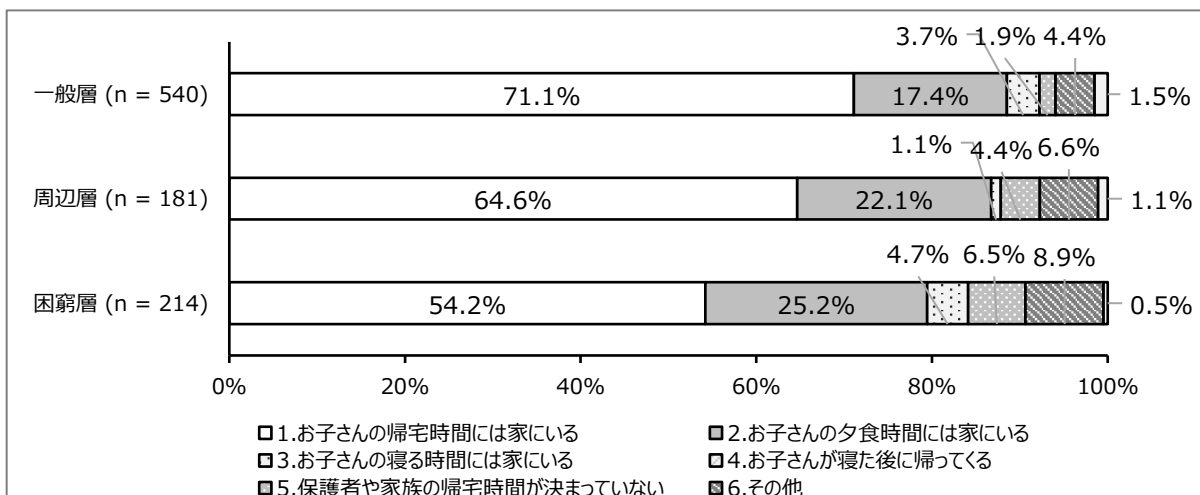
<図表 5-1-1 放課後に一緒に過ごすことが多い人（中高生回答）：生活困難度別>



<図表 5-1-2 放課後に過ごすことが多い場所（中高生回答）：生活困難度別>



<図表 5-1-3 子どもの帰宅時に保護者が家にいる割合：生活困難度別>



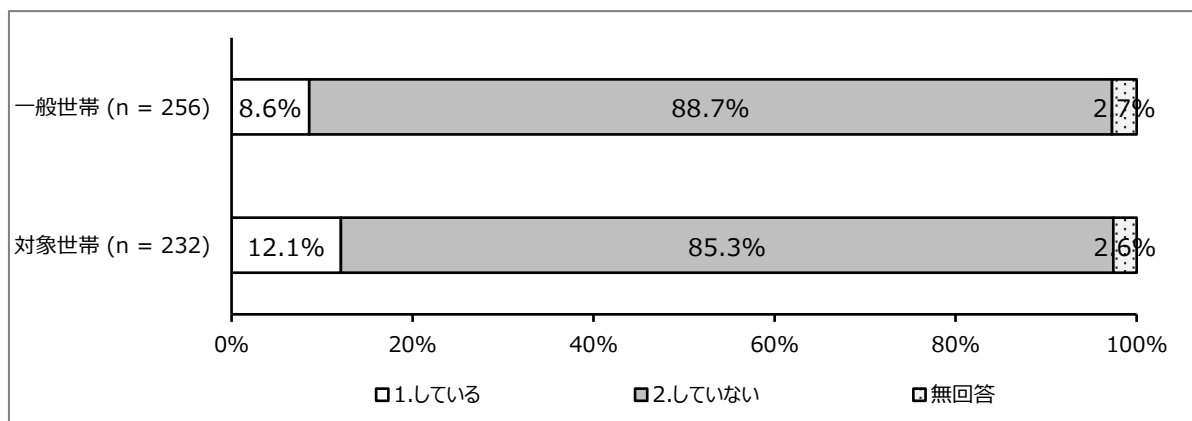
(2) アルバイト

中高生にアルバイトについてたずねた。まず、アルバイトをしている者は、全体の1割程度であり、していない者が大半を占めた。世帯タイプ別に見ると、やや対象世帯の方がアルバイトをしている割合が高かった。

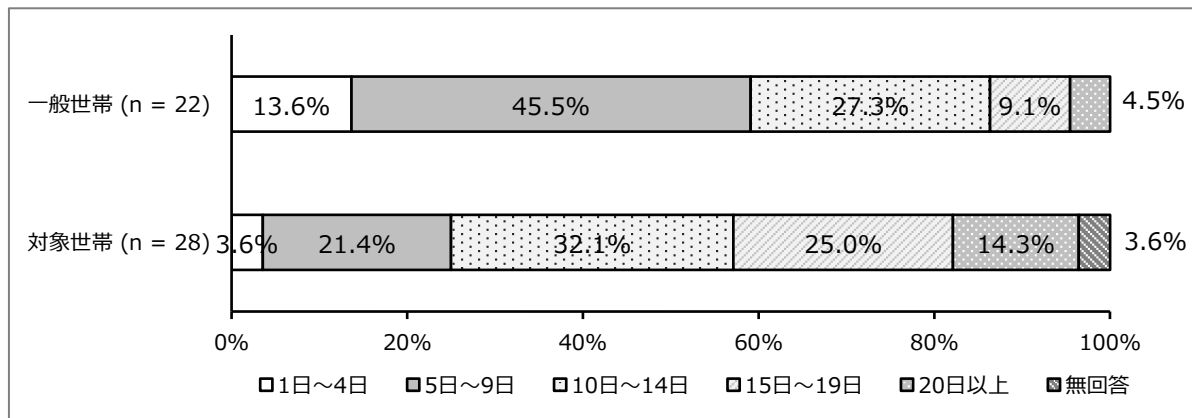
次に、アルバイトをしている者に、「月の勤務日数とアルバイト代」をたずねた。世帯タイプ別では、日数、金額ともに対象世帯の方が多く、日数では10日以上の割合が、対象世帯で71.4%と一般世帯（40.9%）より約30ポイントも高い。金額では、月2万円未満の割合を比べると、対象世帯が10ポイント低くなっている。

最後に、アルバイト代の使いみちをたずねたところ、全体としては「自分のおこづかい」と回答した割合が最も高かった。世帯タイプ別では、「貯金」が最も差が大きく、対象世帯（57.1%）と一般世帯（40.9%）で16.2ポイントの差があった。また、「学校の費用」や「卒業後の費用」の割合も一般世帯より対象世帯が高かった。

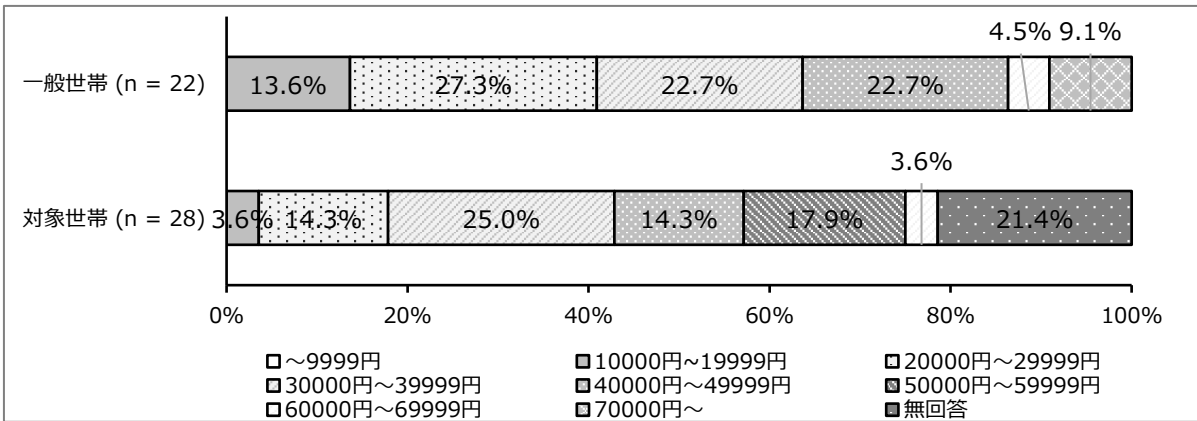
<図表 5-1-4 アルバイトをしている割合（中高生回答）：一般・対象世帯別>



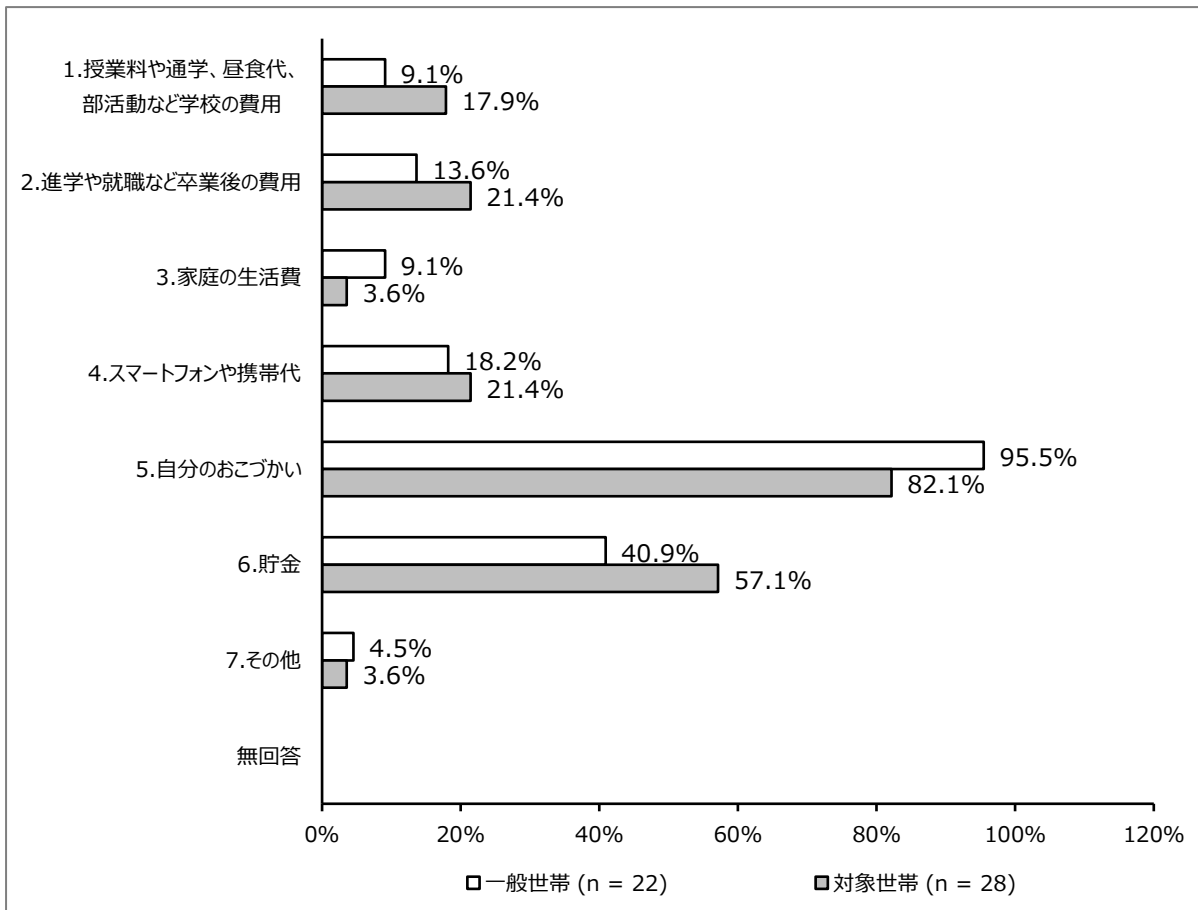
<図表 5-1-5 アルバイトの日数/月（中高生回答）：一般・対象世帯別>



<図表 5-1-6 アルバイト代／月（中高生回答）：一般・対象世帯別>



<図表 5-1-7 アルバイト代の使いみち（中高生回答）：一般・対象世帯別>



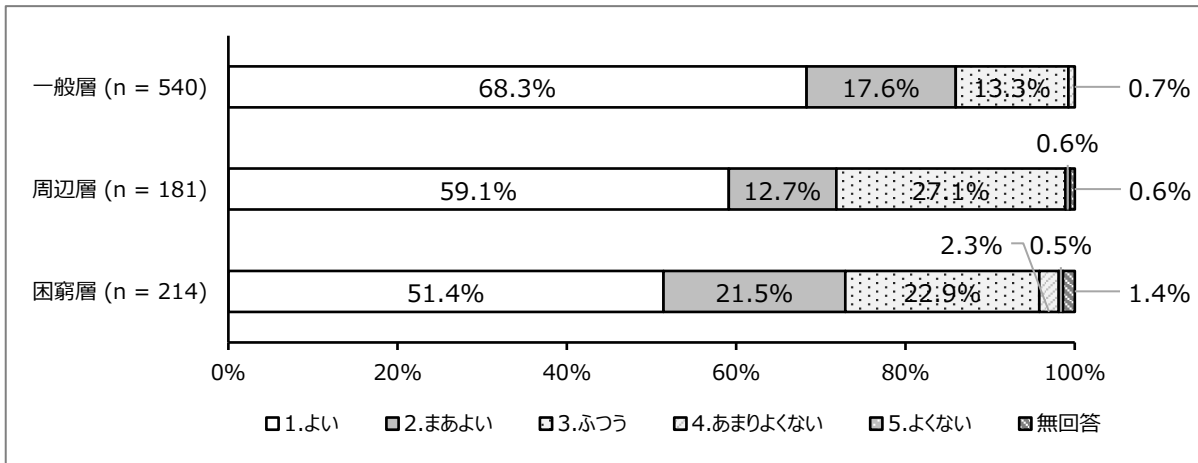
2. 健康状態・障害・自己効力感

(1) 子どもの健康状態

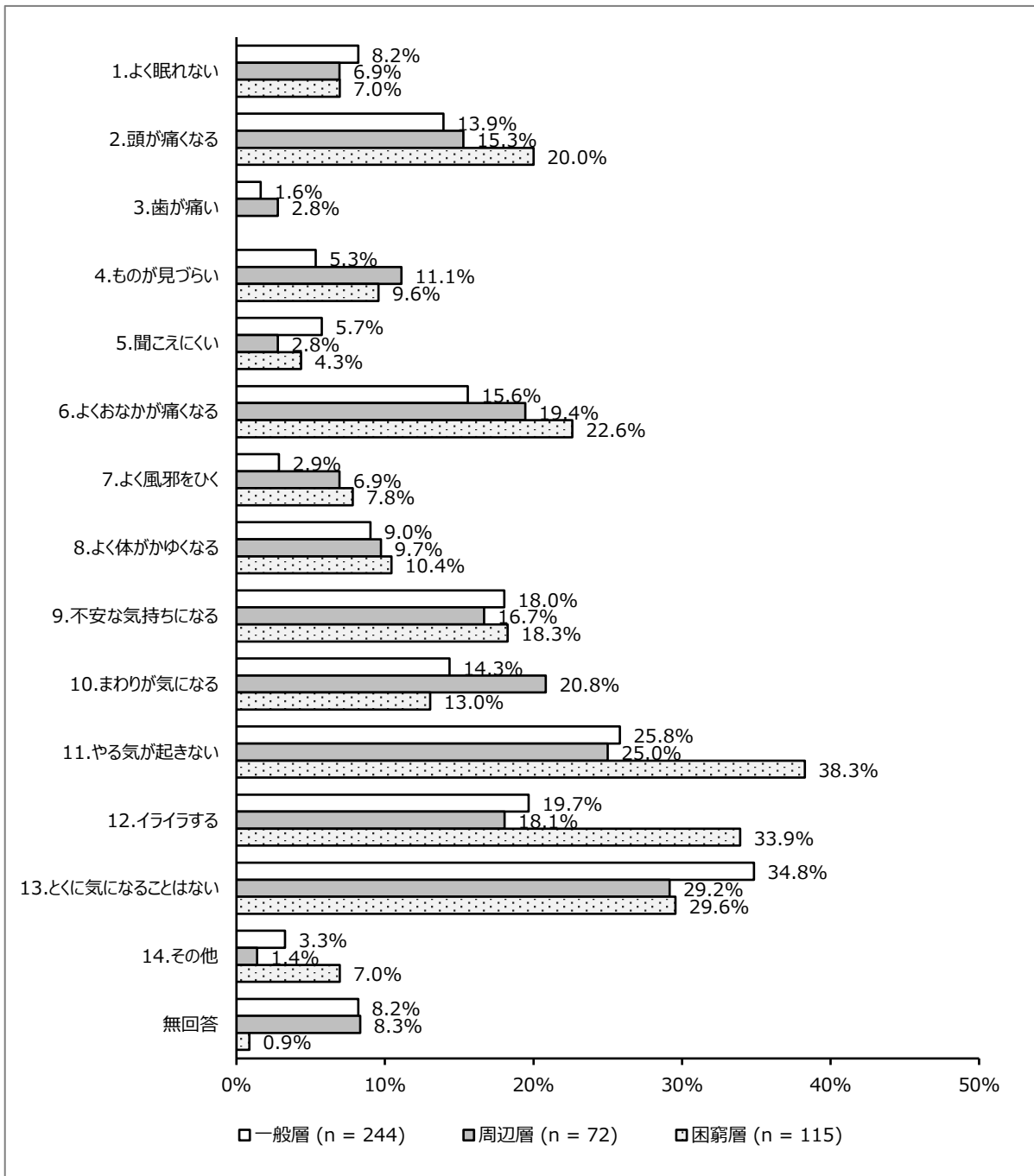
保護者に子どもの健康状態をたずねた。全体としては、「よい」と「まあよい」で約 8 割を占めたが、生活困難度別に見ると、困窮度が高まるごとに健康状態が悪くなる傾向を示している。一般層で「よい」と答えた割合は 68.3%であったが、困窮層では 51.4%と 16.9 ポイントの差があった。

次に、子ども自身に「自分の体や気持ちで気になること」をたずねた。全体として、「とくに気になることはない」(32.0%) が最も多く、次いで「やる気が起きない」、「イライラする」の気持ちに関する項目の割合が高かった。生活困難度別に見ると、困窮層で「やる気が起きない」、「イライラする」の割合が高く、他の 2 つの層と 10 ポイント以上の差がある。また、体に関する項目では「頭が痛くなる」、「よくお腹が痛くなる」が、困窮度が高まるごとに割合が増加している。

<図表 5-2-1 保護者から見た子どもの健康状態：生活困難度別>



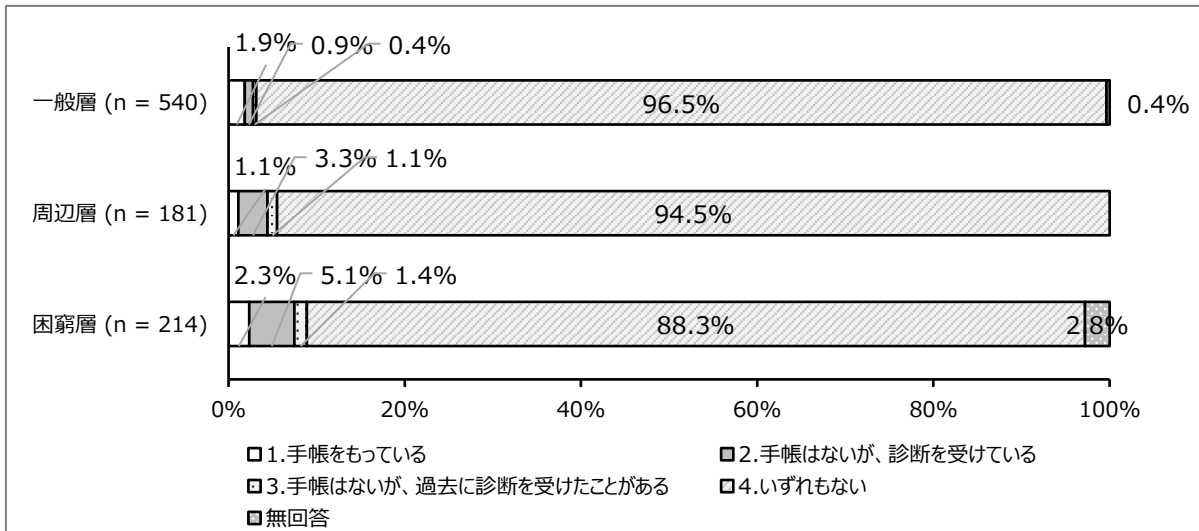
<図表 5-2-2 自分の体や気持ちで気になること（中高生回答）：生活困難度別>



(2) 障害の有無

保護者に、「子どもが障害の診断を受けたり、障害者手帳等をもっていたりするのかわけ」をたずねた。全体の93.7%は「いずれもない」と回答しているが、無回答を除いたおよそ50名（1,050人の5%）は、手帳をもっていたり、現在又は過去に診断を受けていたりする。生活困難度別に見ると、「手帳はないが、診断を受けている」の割合が、困窮度が高まるごとに増加し、一般層は0.9%だが、周辺層3.3%、困窮層5.1%となっている。

<図表 5-2-3 子どもの障害の有無：生活困難度別>

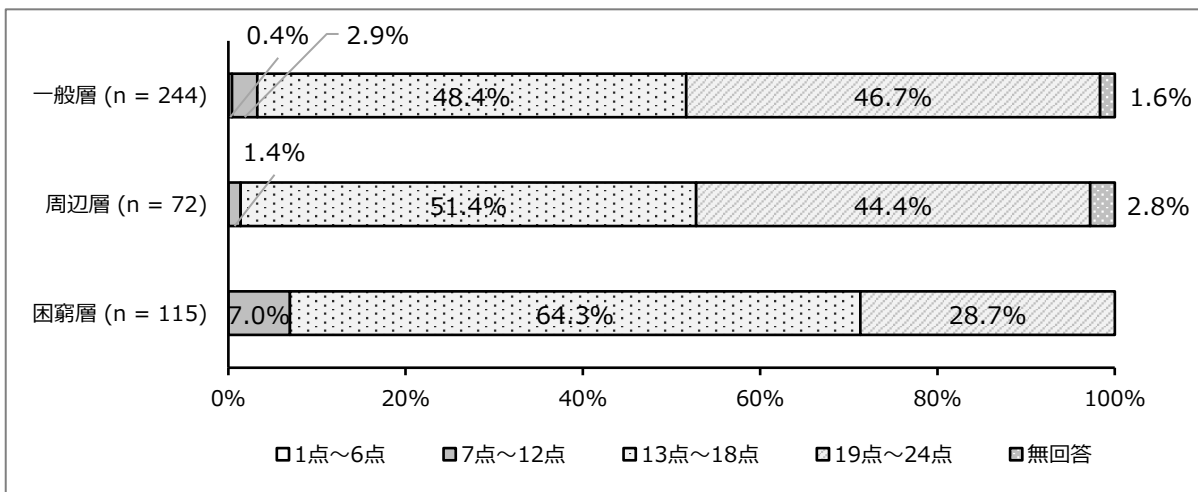


(3) 自己効力感

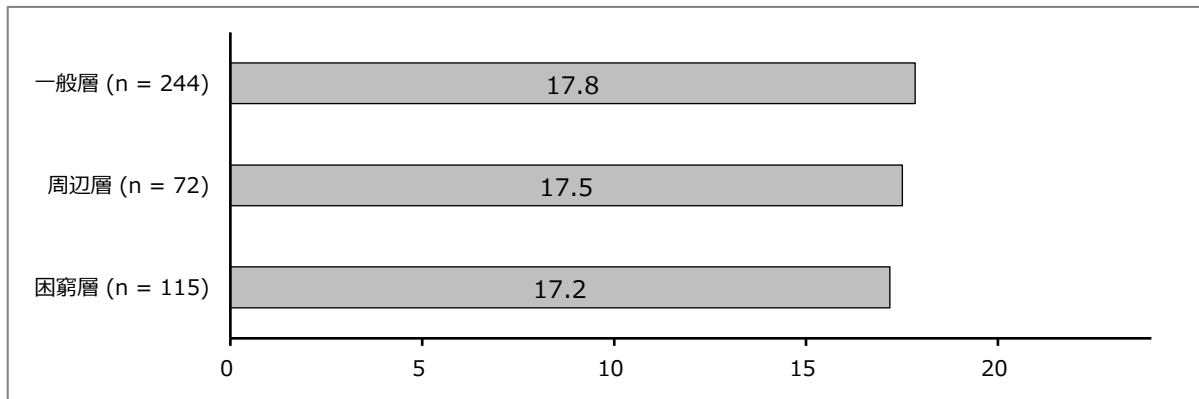
中高生に、「自分に自信がある」、「自分の考えをはっきり相手に伝えることができる」、「大人は信用できる」、「自分の将来の夢や目標を持っている」、「将来のためにも、今、頑張りたいと思う」、「将来、働きたいと思う」の6項目について、それぞれ4段階で回答してもらい、その値を合計し、自己に対する信頼感や有能感の指標となるセルフ・エフィカシー（自己効力感）得点とした。この得点が高いほど、自己効力感が高いことを表す。

生活困難度別に見ると、困窮層は「13点～18点」に集中しており、一般層、周辺層と比較しても「19点～24点」の割合が低い。また、平均点を比較すると、困窮度が高まると自己効力感は低下していることがわかる。

<図表 5-2-4 セルフ・エフィカシー得点の分布（中高生回答）：生活困難度別>



<図表 5-2-5 セルフ・エフィカシー得点の平均点（中高生回答）：生活困難度別>



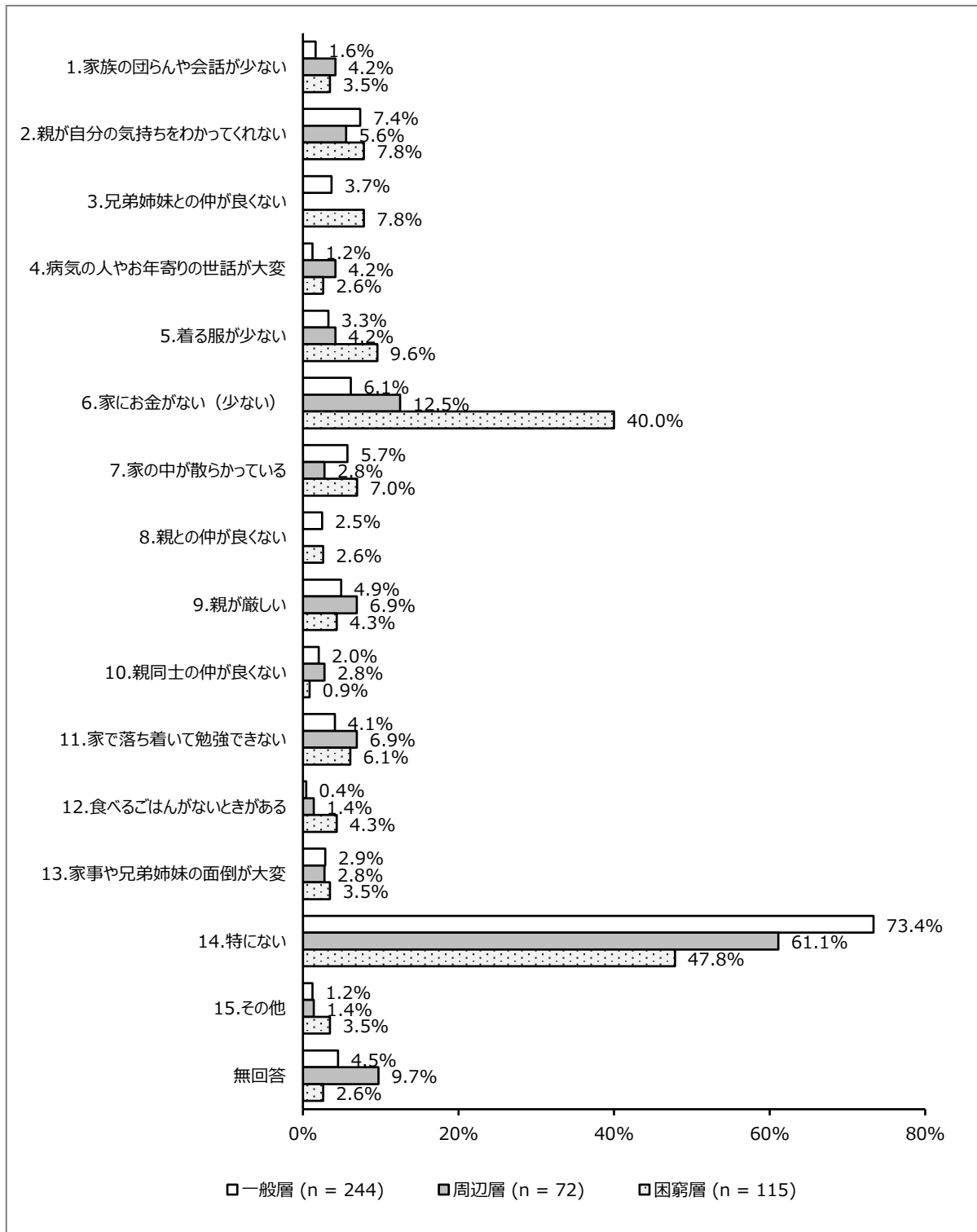
3. 子どもの悩みや相談者

(1) 困っていること、悩んでいること

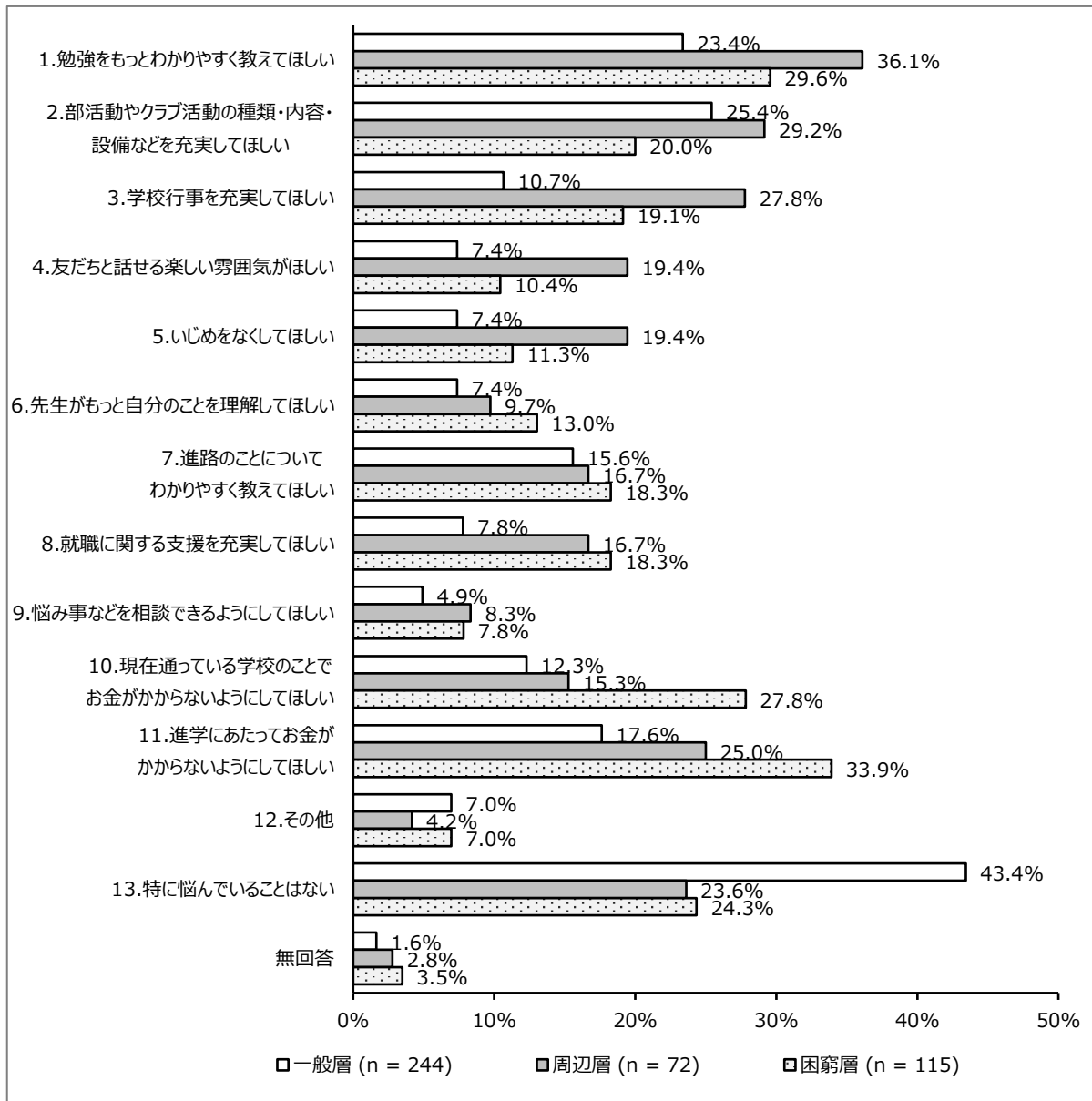
中高生に、「家族のことなどで、困っていることや心配なこと」、「学校のことについて悩んでいること」をたずねた。まず、困っていることや心配なことについては、「特にない」が最多となった。ただし、生活困難度別に見ると、一般層では 73.4%であるのに対して、周辺層では 61.1%、困窮層では 47.8%と、困窮度によって差が生じている。また、困窮層では「家にお金がない（少ない）」の割合が突出しており、一般層の 6.6 倍となっている。

次に、学校のことについての悩みをたずね、生活困難度別に比較した。一般層では「特に悩んでいることはない」（43.4%）が最多であったが、周辺層では「勉強をもっとわかりやすく教えてほしい」（36.1%）、困窮層では「進学にあたってお金がかからないようにしてほしい」（33.9%）が最多の割合となり、悩み事の有無や種類が生活困難度によって異なっていることがわかった。

<図表 5-3-1 困っていることや心配なこと（中学生回答）：生活困難度別>



<図表 5-3-2 学校のことについて悩んでいること（中高生回答）：生活困難度別>

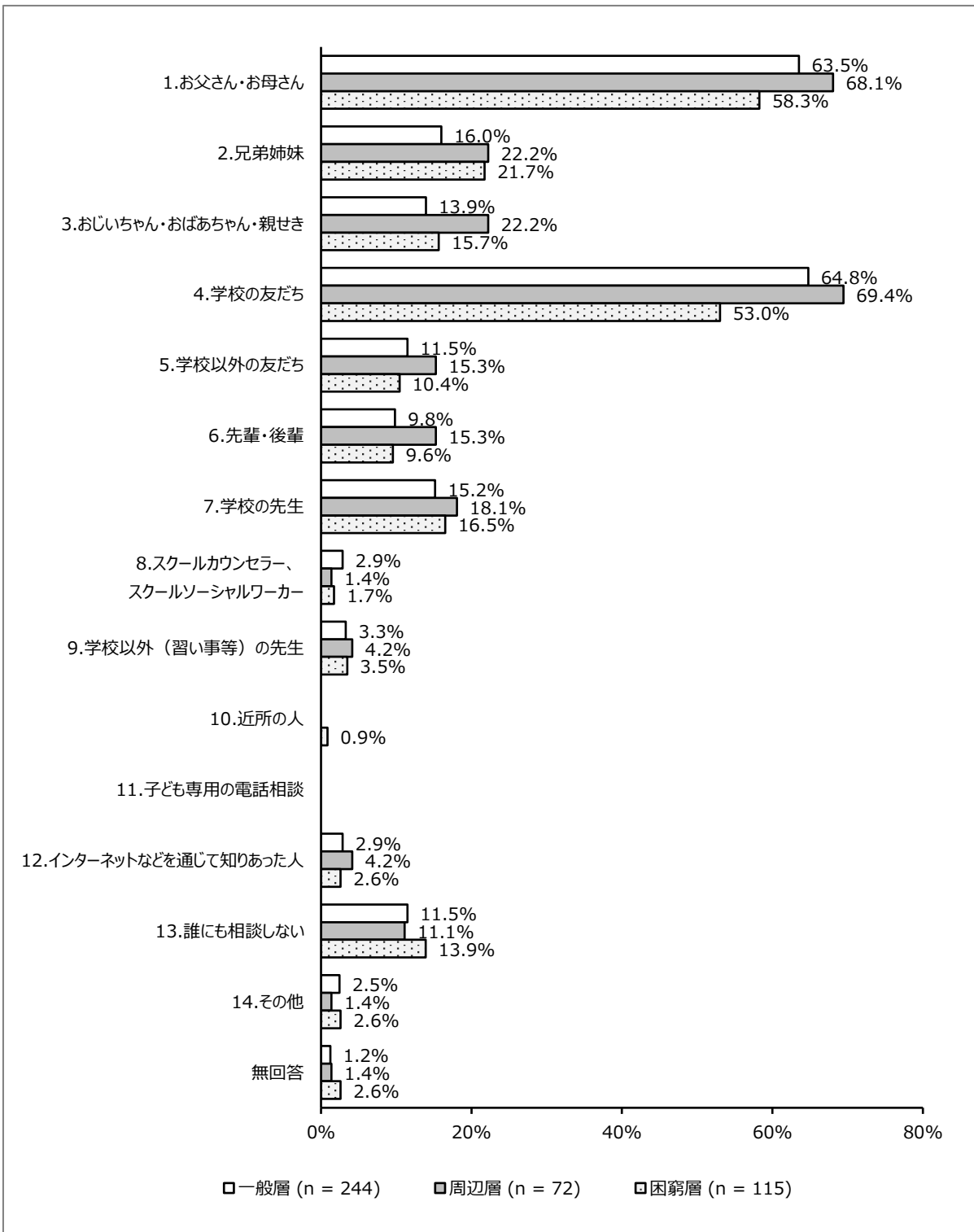


(2) 相談者

中高生に、「困っていることや悩んでいる時に相談する人」をたずねた。全体として「学校の友だち」が最多となっており、次いで、「お父さん・お母さん」となった。一方、「誰にも相談しない」者が、いずれの層も1割程度いる。生活困難度別に見ると、「学校の友だち」が最も差が大きく、困窮層（53.0%）と一般層（64.8%）で11.8ポイント、周辺層（69.4%）とは16.4ポイントの開きがある。

次に、「子どもの周りにいる親以外の大人で、信頼できる人や相談できる人等の有無」をたずねた。いずれの層も「信頼できる人」の割合が最も高く、全体で4割程度が選択している。一方、「特にいない」、「道で会ったらあいさつしてくれる人」、「自分を大切にしてくれる人」は、生活困難度別の差が大きい。それぞれ、一般層と他2つの層で10～20ポイント程度開きがあり、困難度が高くなると、そのような大人が周りにいると感じる割合は減少する。

<図表 5-3-3 悩みなどを相談する人（中学生回答）：生活困難度別>



<図表 5-3-4 子どもの周りにいる親以外の大人（中高生回答）：生活困難度別>

